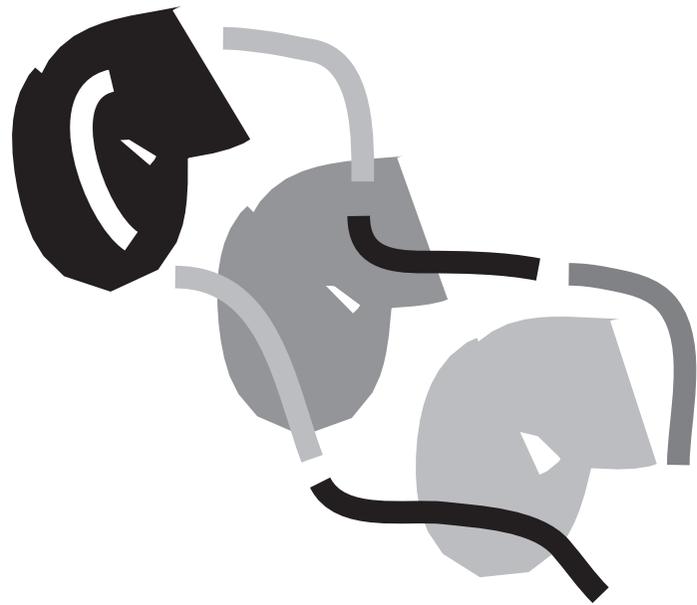

月 刊

MéLange

VOL.82



2013.06.30

詩/エッセイ

月刊

「MéLange」VOL.82

2013/06/30

月刊「MéLange」編集部

詩

82号巻頭作品 雨滴散布	情野千里 3
鳥では	中嶋康雄 4
火の穂	岩脇リーベル豊美 5
不在証明	野口裕 6
おいしい牛乳	上野都 7
道	川田あひる 8
鹽の種	福田知子 9
タブローにタブローへ	大橋愛由等 10
錯乱、網、そして灰	有時秀記 12
魔法	富哲世 14
開かれた日	高谷和幸 15
とてつもなく自由に描く	月村香 15
鉄梯子を登る私と羽根、羽根、羽根の話	中堂けいこ 16
砂浜	寺岡良信 17
エッセイ	
△詩人通りより▽6 「文法と神についての反時代的考察」	岩脇リーベル豊美 13
△さまよう星座詩学▽2 「蟹座 ガルシア・ロルカ」	安西佐有理 11
△夜の調べに寄せて▽49 『野ばら』のことなど	寺岡良信 18
△神戸詞あしび▽71 「情野千里さんの川柳を読めば」	大橋愛由等 20

編集部だより★02/ウォルター・ホイットマンとならんで米国を代表する詩人と評価されているエミリー・ディキンソン (1830~1886) の紹介を、第82回「Mélange」読書会にて、平岡けいこさんに担当していただいた。南北戦争時代に活躍したひとで、ピューリタニズムの影響が強い「元祖アメリカ」と言い得るニューイングランド地方に住み、そこで詩作をした。生前はほとんど知られることのなかった詩人だったが、死後に妹が大量の詩稿を見出し、いくつかの経緯を経て、出版され、現在の高い評価につながっている。(大橋記)

◆雨滴散布

情野千里

三十三歳年下の友人は、生後八か月の長男に授乳を試みるが、ローブ・デコルテ型のウエディングドレスは、肩紐もなく乳房を取り出しやすいとはいえず、そこが披露宴の席上であることが災いして、出すに出されず遣るに遣られず。三十三歳年上である私も、戯れに孫に含ませる乳房を持つとはいえず、「六十後家は立たず」の風評嫌って、出さず遣らずの二人女弁慶、立ち往生。

洗面器からこぼれるアフリカのダンス
 離婚前夜を剥がして使う木の器
 ウルグアイへ靴乾しに行く夕化粧
 継母も実母も苦いほたる狩り
 豆腐男とトマト女が舟を漕ぐ
 走り幅跳び 貧民窟を越えた母
 どこかむず痒くて隠元豆の発芽
 雨雲に手を入れて出す餃子の具
 手元不如意であり焦茶の焦げである

◆島では

中嶋 康雄

島では、赤い点の虫が空間からこぼれ落ちる。壁の隙間とかそういう物理的な隙間ではなく、あえて「隙間」というのであれば、たとえば、何もない目の前の空気の「隙間」あるいは「歪み」からポロポロとこぼれて、食用キノコの一種の傘の裏や、食用野菜の一種の葉の内側にもぐり込む。その大きさは一ミリかそれにも満たない。島では、象は神そのものである。象は人の掌よりも小さい。その鼻の数ミリの輝ける振幅は数人の島民の全生涯よりも重要である。

島では、体長が一メートルを超えるクワガタムシがいる。ときには体長が三メートルを超えるものがおり、島民の子をその大顎ではさんで離さない。

はさまれた子は虫の神の生け贄

ふんむくれつきゆのトーントーン

子のはさまれて体が切れればその年は豊作

ふんむくれつきゆのトーントーン

子のはさまれて体が切れなければその年は凶作

ふんむくれつきゆのトーントーン

子のはさまれて緑の血が噴き出ればその年は豊作

ふんむくれつきゆのトーントーン

子のはさまれて紫の血が噴き出ればその年は凶作

ふんむくれつきゆのトーントーン

赤い点の虫がどこから来てどこへ去るのかは島の永遠のテーマであるから、島の学問は赤い虫のベクトルと関数に溢れかえっている。

「毒アマガエルの指の隙間における赤い虫の関数」を八〇〇〇ページの論文に著わした者が島の最も偉大な教授である。「虹色毒ナメクジの走光性におけるベクトルの研究」を九〇〇〇ページの論文に著わした者が島の二番目に偉大な教授である。

島の蚊は病気をはやらず。

病原体のウイルスはRNAしか持っていない。

笑う

笑う

RNAの笑いを繋ぐウイルスが島民を離さない

十年前はたくさん死んだ

百年前は半分死んだ

千年前はほとんど死んだ

象の神に乗った王が女たちを子沢山にした

象の神に乗った王の子が黄金のクワガタに

はさまれて

体がまつぷたつ

緑の血は吹き出す

満ちるミドリ虫が王の子の腸から

這い

歌い

踊り出た

ほうほうほう 緑溢れる ほうほうほう

ほうほうほう 緑溢れる ほうほうほう

島では、約千年前、ある王朝が転覆し次の王朝が島を支配するまでの、一切の記録が残らない百数十年の歴史の空白がある。

島から、人の掌よりも小さい象の神が月に渡る。赤い点の虫の絨毯を人の掌よりも小さい象の神が渡り、月に渡るので、月には人の掌よりも小さい象がいるし、即ち神がいる。だから、月は神聖である。

近年、月に組織的に産業廃棄物を捨てる島民がいることが判明した。月の裏側に捨てているのでわからなかった。

月の裏側で、ヘドロにまみれた人の掌よりも小さい象が怒り狂い、

ヘドロにまみれた体長三メートルを超えるクワガタムシがドロドロドロ

島の子を挟みにやってくる

月から島に

赤い虫の逆さ絨毯が敷かれる

赤い虫は、なにもない宇宙空間の「隙間」あるいは「歪み」からポロポロとこぼれて、絨毯状のコロニーを形成し、そのコロニーを食べながら、月のヘドロにまみれた体長三メートルを超えるクワガタムシが島に島の子を挟みにやってくる。大顎からヘドロがドロドロ垂れ下がり、尖った口からは赤黒い猛毒コイルタールのような猛毒舌がチロチロのぞいている。

島の子

島の子

よつといで

島の子

島の子

◆火の穂

岩脇リーベル豊美

炎を一筋も見落とさないよう

聖ヨハネの篝火を見つめていた

日は翻りながら

深い時刻にようようと黄昏れ

夏至の夜気が冷凜と佇んでいる

闇の向こうに息う人が

揺らめく火は決して厭きることがないと

誰にともなくいうのを聞いていた

ひと時の生に踊る脚は

辛苦から解き放たれても

このくるぶしが

もう誰のものなかわからない

月は満ち

接骨木に精霊を送りだす

漆黒の実をつける

雪の花を祝福する

時間の外側で降り頻る破片

生はひとり火影である

皮膚に限られた空間

名前さえ忘れた人間は透明である

◆不在証明

野口裕

非在はすべて不在であるから
時に存在へと変貌する
と断じたのは誰だったろうか？
ともあれ

その真偽はこの廃屋にゆだねられている

かつて廃屋が銀の器に蔽われていた頃
金器の不在ゆえに金は存在しないと主張した
王付きの占星術師は火刑となった

銀は金と等価であると
武力による貿易を推し進めた宰相は
この廃屋で晩年を過ごした

だが

そんなことはどうでもいいのだ
とにかく廃屋を見つめ

しつこくじつとじつと見つめれば
非在は不在にすり替わり
不在のあいっはひよつと顔を出す

やつれたなりに
借りた金返せとあべこべに言うかも知れないが
倒錯したまま出てきたのだから

それも我慢しよう
金も返そう
あいつが来たなら話が変わる

そう思つて見つめてみると
現れてくるものは
床の埃と乾上がった流し台
羽根を休める蝶と

隅の蜘蛛の巣
どこにもそれらしい姿はない
毀れた時計の秒針は
心臓の鼓動と重なる

あの蝶は化身か？
とすると蜘蛛は私か？

蝶はその手には乗らぬとばかり
壊れた小窓から出て行つた
ストーカーならそれを追いかけるだろうが
蜘蛛は動かない
不在を絡め取る網が待つことを強いるのだ

千の手を持つ観音が

欲望のままあらぬものを現出させるとしたらノ

廃屋の外には

房となつて凝まる白い小花が
点々と散っている

非在が存在へとすり替わるなら
存在もまた非在に溶け込むのだと
あざ笑うように

◆おいしい牛乳

上野都

おいしい牛乳と書いてある
だから買う

飲めばわかる
飲まなくてもわかる
おいしい味はおいしいから
おいしいからおいしいので

平仮名で書いてある
その中に隠れた漢字が見える
見えないままに買うからおいしい

ささやかな貧困と
ささやかな贅沢
そのあいだでぬるりと真つ白の白

脂肪はないのにコクがある

わたしを雑巾のように絞る無脂肪牛乳
真つ白でいて

赤い
黒い
万 万 億 億 兆 兆
だから また買う

買つてきて良かったおいしい牛乳
いつも一人で飲んでしまう
漢字で書きたくて苛立つわたしから
ひざまずき両手を差し出した真つ白が

拭いても拭いてもしたりたり落ちる
毎日それを
一〇〇〇ミリリットルと書かれた箱に
とろとろと注ぎ込む

平仮名は間違いやすいから
死ぬまでには
せめて一度
漢字で書いてやりたいおいしい牛乳。

◆道

川田あひる

草原の
むこうに 森
トドマツの幹にアカゲラの雛
親鳥は アリやセミをはこび
子育てに忙しい
あの時代を
過ぎ

一握りの怒りが君臨する下で
喰うや喰わずを喰えなくする嫉みと
愚痴が 激しく
ぶつかり
おびやかす

そんな時代の
片隅で

澗の奥から噴き上げる真清水を
夢想し
沼に沈めた
人体を
起こす
道に
いる
目のわるい年寄りも
巡りめぐり
生きかえる
道があつた

道の彼方
まだ灯台は見えないが
生きよう
道を
行く

◆鹽の種^{しお}

福田知子

掌に土を盛り鹽の種を蒔く
凍るほどに冷たい水をじょうろに充たし
はらはらとこぼし土を湿らす
掌の温もりで水は僅かにあたたまる
じつとしているように掌にいう
掌は静かに微動だにしないでいる

そうすると

種は 安堵したかのように水を含みはじめ
一滴 一滴…… 水を含み……
ふつくとゆるやかに膨らみ始める

ここは海
いくつもの掌
かさなるいくつもの掌は

私のものでなく
誰かのもでもなく
珊瑚のようにじつと潮騒を聴いている
伸びる芽 ここにも あつちにも
掌から伸びる無数の芽
静かにしかし力強く殻を破つて。

視ているのは 聴いているのは
私ではない あなたでもない
鹽は種から水をひらき 夜をひらき 朝をひらき
そうして ひかりをひらく
鹽の種のサイクル(日常)は 水を呼び 夜と朝を呼び ついに生
命を呼ぶのだ
鹽の種に宿る生命 いのちのみしおよ

海の掌は死に逝くものすべてを種にかえ
土を盛り 水を与え ひかりに照らし 緑の風をそつと手わたす
時を超え 空間を超え
苦界からの伝令を 記憶を すっかり消し去って。

◆タブローにタブローへ

大橋愛由等

五つ目の最後の巾着をあけてしまったから食卓の上にさんざんに置くと勝手に逸脱してしまいそうなので菓子箱の蓋をひっくり返してその中に並べてみるとひとつずつが対になっていることを知って敗者というのはかくも寄り添って生きているのかとしみじみ思いつつソイス瓶を南南西から南南東の位置に変えたのはアルフォンソが故国を追放された直後に座っていた席よりミシエルがエピステマーを論じた時に座っていた席の方向を選択しただけであって食卓の北端に置かれたカイエには朝餉にエチオピア産モカコーヒーを飲んだ日をかきいしくも星印つきで記述していることやいつも決まってデリートキーだけを踏んで横切る猫は世界は消去で始まるのだとぼくたちに示唆しているという二つの表象が横たわっていることは既知のことだけど今度は塩壺の中身をたしかめてみることにして情況の果ての海から採取したその塩はその海を挑発するように存在する岬に棲む詩人の悲しみをたつぷりと結晶化しているのだろうとひとつかみしながら憶いつつ塩壺の横には切手を貼るだけにしている手紙が置かれていて投函しない躊躇は切手の選択ではなく書いた文字が熟成するのを待っているわけでも勝手にガリシア語に変異してしまうのを恐れているわけではなくこの食卓にあるものたちやここで生起したこともを叙述してきたのかどうかという疑問と未送で封印したままでありながら封筒に返書が封入されていることを待っているからに違いないと再びソイス瓶の位置を替えてみるのである

さよまよいの星座詩学

Happy Birthday, or, Bright Heads Revisited

安西佐有理

第二回 蟹座

コルヴォ男爵 (フレデリック・ウイリアム・ロルフ)

Baron Corvo (Frederick William Rolfe) 一八六〇年七月二日〜一九三年一〇月二五日 ロンドン生

【西洋占星術プロフィール】太陽 蟹座(金星・木星と合、火星と衝)、月 乙女座、

水星 獅子座(土星と合)、火星 山羊座、木星 獅子座、天王星 双子座、海王星 魚座、

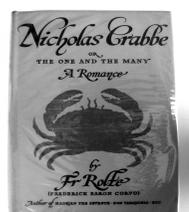
冥王星 牡牛座、キロン 魚/水瓶座?。上昇宮 双子座、MC 水瓶座。

ローマ教皇になり、ヴァチカンを質素・開放路線と唯美主義で改革するばかりか、全世界を帝国や王国に再編しながら、貧しい俗人時代と変わらず猫と煙草と詩集を離さない蟹である。あるいはアドリア海を行く自家用小型帆船で、大震災後の死屍累々たる小島から救出した中性的な男装の美少女に慕われ、美味なコーヒーを淹れる役目などさせつつヴェネツィアへ戻る孤高の作家という蟹である。

その蟹は、コルヴォ男爵を名乗った英国人フレデリック・ウイリアム・ロルフが、実人生で叶わなかった復讐と成功の白昼夢をつづれ織りにした小説『ハドリアヌス七世』『全一への希求と追慕』の主人公たちだ。ロルフはカトリックに改宗して聖職を目指したが放逐され、絵画や写真、文筆でも満足できる生活には程遠く、小さな賞賛と多くの中傷誹謗にまみれ、友を作っては敵とし、極貧と孤独のうちにヴェネツィアで客死した。中井久夫によるとネオプラトニズムへの親和性とパラノイア的性格や責任転嫁傾向は一部で重なるそうだが、単なる誇大妄想の厄介者や、痛ましい挫折者の蟹ではない。蟹座の生まれと蟹(座)的な性質を、ことさらに自覚し、自己の神話として生きてみせたロルフ自身の、虚構だがあからさまで、驚嘆する強靱な一貫性を持つ自画像でもある。作家は、その名もクラップ (Crabbe. Crab は蟹)。教皇は、若かりし頃のオルターエゴである潔癖志向の悩める神学生に出会い、七月生まれと聞き出して占星術的な計算から、居場所に馴染めない不幸について会話を進める(「家」と思える場所は、蟹座の価値観に重要な位置を占める)。さらには豪華な貴石や宝飾品を嫌い、穏やかな深みと永続性の光を放つ、薔薇色のアレキサンドライトや、蟹座の守護石ムーンス

トーンを手に瞑想する。そして繊細さや慈愛、寛容の発揮は「敵と味方」の構造を引き立て、敵を許した教皇は死ぬ。味方と深く受け入れあった作家は瀕死状態から生還する。それでいて物語は病理や法、占星術の領分ではなく、偽りない没頭で緻密に描き出されて空や水に開かれた景色の中にある。古風で荘重な演出の間に、ハイフンで繋いだ造語的形容詞や、頭韻や口語で放たれる言葉の小気味よささえある。上田秋成は俳号の一つ「無腸」(蟹の意)で、幼い頃に病を得た手の形と、内柔外剛、狷介孤高な性格を自ら諷したそうだが、そちらが地味に風流でいて凶暴にもなる現実のサワガニとすれば、こちらは似ても焼いても食えない、そのくせ取り澄ましたところもある、十二宮図の巨蟹の缶詰だろうか。

しかしこのロルフ蟹は、妙な嗜癖を引き起こすし、半端な付き合いでは心底嫌いにもなれない。最初に行き当たったのはW・H・オーデンが『全一』の序文を書いていたのを知ったからかオスカ・ワイルドの最初の伝記作者クリストファー・ミラーの評伝経由か、以来しばらく、神戸元町や神田の洋書店、そのうち航空郵便とファクシミリで繋がるイギリスの古書店のお世話になりどおした。ロルフが小説で一絡げに「アメリカ共和国」とした南端の地から初の教皇が選ばれ、シベリアぐるみで「日本帝国」に仕立てたアジアは喧しく、全一の上き片割れ探しが盛んで、全能感満載の「中二病」ライトノベルも珍しくない世の中になり、白手袋もせず久々に頁を繰ってみれば「迷信といった、願われ予言され想像されるものは、人生における詩」などと教皇が断りも臆面もないマシュー・アーノルドの(元はゲーテの)引用で司祭に応答するのに鼻白んでも、まだ当面は本を手放さずにおこうと思えたりする。一時は進んでロルフの面倒を見たがやがてうんざりした人物の一人は、千一夜物語の、親切な旅人が肩車で川渡しをしてやると、その首に足を巻きつけて下りずに一生「乗り物奴隷」にする怪物老人に彼を譬えたらしい。稀観本マニアや「腐女子」でもないのに、風変わりな蟹に指を挟まれた身には、笑えるようで笑えないようで、やはり笑える話だ。



※写真は自伝的三部作のうち一冊『ニコラス・クラップ』表紙(著者蔵)。

蟹はロルフのデザインに基づく。ロルフ関連の和書には河村錠一郎による評伝、伝記や書簡の邦訳がある。

◆錯乱、網、そして灰

有時秀記

古代音楽を乗せて微風が深い記憶の河を渡つてくるとき、オルペウスの豎琴が群青のさざなみをかぶりながら見えない河を流れる。記憶の河の深淵からかすかな音律がとどき、まなこを閉じたオルペウスはさながら永遠の恍惚を律の上にただよわせている。豎琴の音色は魔術的調和に満ち、惑星の波動との照応をひそませながら豊かな古代の息吹きを響かせる。

やがて夢の深みで覚醒がおとずれ、見えない河を流れる豎琴が、喧騒の高層建築群のはざまに入ると、音の調和は崩れはじめる。波のかすかな高低に合わせるかのように、あるいは荒れあるいは沈み、調べが乱れ、豎琴は波をかぶりながら、錯乱の境域に侵入する。

オルペウスの顔は軟体動物のようにぐにやぐにやとゆがみ、その音色は失語症患者のような錯乱を呈しはじめ、その口唇から吹き出す「までしきるいぬ」は喃語のように統一性をもたないままに乱打する。

まるでビールがルビーのように赤くなる日、出会いを求める人達がかみ合わない言葉に身をゆだねる。死はずから喃語を話したときからすでに内部で孵化しつづけ、気がつくと火宅の宿から鳩が飛び、蟻が歩くのを確かなまなざしのなかに留める。しかし喃語は死の胚胎したときから、喃語そのものもつ混沌のなかで獲物をとらえる網を求め、ぐにやぐにやのしんきろうから脱け出そうとする。留守にした火宅の宿に網は長く不在のままに旅人の記憶のなかにのみその痕跡を残す。息をするための空気は生き物に無償で与えられるが、無償性が、あるであろう網の記憶の持続を保証するだろう。ぬばたまの夜につきながら、旅人が、眠りのなかの夢の深層で錯乱し、青い青は錯覚であると知るゆえに、夢の深層でかえって透明の網が降臨する。

ぬばたまの夜に、あるであろうものの不在をうばって真珠がしたたりおちるのは、夢の深層を流れるオルペウスの豎琴が、あるであろう透明の網を弦にして、妙にしてあえかな幻想ソナタを奏するときだろう。そのとき網はあるであろう天上音楽の誕生にひとときわ熱狂的に湧きたち、熱狂が生み出す赤く白い灰となつて崇高な高みへと舞いあがる。そうして熱狂とともに、したたりの真珠は天の眠りに沈むだろう。

文法ということを殊に意識するひと月であった。否、この四半世紀以上、意識しない瞬間はなかったように思える。詩人通りには、毎日同じようなことを吹きながら帰宅している気もするが、それは、母国語以外で会話したり、思考したりするからということではなく、また、授業で体系文法を―学校文法もしくは規範文法とすることなのであるが―取り上げているからということもなく、詩人通りには、文法とはひとつの虚構ではないかと考えられるような場所だからだ。

現代詩人であつてもなくとも、(比較)言語学とかいうものになると、ソシュール以降の構造主義やポスト構造主義、ローティなどの言語的転回がすぐさま思い浮かぶだろう。ただこれまで、わたしは言語をひとつの思想として位置付けて論証したことがなかった。そこで、ということもないがこの六月、やはりニーチェで、四半世紀悶々としていた内面の根拠を見定めるべく、これもまた、ということもないのだが、『ニーチェの言語および宗教批判とその後の展開』と題して東京の学会で小さな個人発表を行った。

ニーチェの言語批判は宗教批判と直接連動している。それは、人間の真理認識に際しての言語機能への懐疑と、また言語による美的創造性追究への意志が、主

詩人通りより／6 文法と神についての反時代的考察

岩脇リーベル豊美

体、理性、存在、神等を問う形而上学全般への懐疑となり、宗教批判を要請している。初期著作『道徳外の意味における真理と虚偽について』では、すべての言語表現は隠喩であり、現実世界と言葉は一致しておらず、人間の知による認識は捏造であると論じられるのであるが、そこには、思想史で無条件に容認されてきた真なる(と思込んでいる)認識としての価値評価や、言語の神性という大前提が意識的に問い直されることになる。この着想はニーチェ思想に一貫していて、最後の『偶像の黄昏』でも、言語の起源で実体・原因として不可避となる「自我[Ich]」概念の本質が、神への信仰成立の心理過程と同一のものであると捉えられ、「わたしは怖れている、我々が神を断ち切れないのは、我々がまだ文法を信仰しているからだ」という命題が、ニーチェ後の思想に、とりわけ近年のそれに、多様な契機を与えていると思う。

その展開として、ヴィットゲンシュタインの言語分析とミュンヘンの宗教哲学者ロベルト・シュペーマンの『神の存在証明』を挙げたが、ヴィットゲンシュタインの「家族的類似Familienähnlichkeit」や「哲学とは詩作Dichtung」であるの

み」等のワクワクする論は別の機会にさせていただけばうれしく、日本ではあまり紹介されていないシュペーマンの文法と神の存在証明について少し。

「現代の迷信[Abglauben der Moderne]という盲目的科学信仰の時代に、自我・神のような言語・宗教による上位概念の破壊は、一方では言語の限界と認識および科学に対する不信を、また一方ではその多元主義的性格に反して、上位概念への回帰(悪く言えば前啓蒙主義への回帰)というアンビヴァレンツを生み出すことにもなるという事態が起こるが、シュペーマンは「神への信仰の合理性」を中心に、神の存在証明を試みる。ニーチェの「我々が神を断ち切れないのは我々がまだ文法を信仰しているからだ」を引用しながら、ニーチェがこのような叙述をすることさえ文法に信を寄せていたからだとして、「真理は神を前提とする」という証明を文法により、正確には「未来完了形」から発するのである。

「未来完了形は我々にとつて現在形と結びつくと必然的に考えられる。何ものかが現在存在するということは、未来に存在していたということ同意義である。この意味であらゆる真理は永遠であり、現在形は将来、現在の過去形として常に現実のままである。それは、その因果関係によつて現実が残した痕跡であり、ますます微弱になつていく痕跡である。このような痕跡は残したものがそれとして自ら警告される限りにおいて痕跡である。この過去現実、つまりあらゆる真理の永遠に真であることは何か。我々は、すべてが生起し停止するような意識、つまり絶対的意識を考えなければならぬ。かつて発せられなかった言葉はひとつもない、かつて経験されなかった喜びはひとつもない。事象は移り変わるが生起しなかったことにはされ得ない。現実が存在するならば、未来完了は不可避であり、そしてそれは現実の神の公準である。」

Robert Spaemann: Der letzte Gottesbeweis. München 2007. S.31f.

つまり、すべての事実真理は永遠の真理である。あらゆる現在とは未来にある現在の過去形である。したがつてある絶対的意識、つまり神にとつて現在形なのである。この証明は文法形式の合理性に基づきながらその合理性を神の合理性で根拠付けるような循環論法であり、決定的な理論であるかどうかは疑問が残るが、シュペーマンは、永遠なる真理について未来完了形には神の存在、つまりその意識により、創世における一切の永遠なる真理がとりおかれていくという。文法を創世と創造神の関連へと通じる入り口であると考えているのだろう。

詩人通りに戻つてから数日後、夏至の聖ヨハネ祭の篝火に恩師より招待されたことを報告したら、予想通り「超保守主義者」と呼んでいたが、篝火に隠喩を見ることがあるのである。

◆魔法

富 哲世

ほおはいほいと階段を降りる
ほおいほいと坂道をくだる
その昔さかな売りの
なお七さんが
人生のくさ味を消し
旨味をひきたててくれるという
さかなにかけた魔法を売りに歩いた

鏡のなかで

今朝

家のだれもが死んでいなかったことになぜかほっとして
壊れながら陽気に出かけていった

世界はパズルだ

烈日を暗示する白衣を着た太陽が
静かに小さなけものたちを焦がす
アギトとにおいと影を放つ
小さな狂おしい
嘆きの天使

鳩が近くの林で
クウクウ クウクウ オロロ
と喉を鳴らしていた
樹々は枝々の股に小さな腰掛けを用意していた

なお七は 終日

ゆつくりと

傾くじかんに呼ばれていた

◆開かれた日

高谷和幸

六月の黄色い花が見える窓から、わたしたちはその手前にいる開花しない壺です。あなたは、鎮守の樹々の間でゆがんだ自画像(究極の進化をとげる)にも記憶のある装置がはたらいているんだわ、と耳もとで可笑しそうにわらう。ワンピースに黄色い花をつけて、あなたはどこにでもある窓の、その向こうで開いている。見えるよね。「うん。猿に似ているみたい。」仮面の中のふざいひとをあたためて、青い聖書を読むそぶりが、わたしたち(痩せた壺のように立っていた)の肩さきにただよってはきえていく。「とまれ。」けむりがけむるすくに、台所の窓を押し開けた猫を追いかけて飛び出しました。引き攣って、ほら、逃げそびれるけむり。可哀そうなピグミ一族の猫ども。復活したら誰の骨に戻るのだろうか。終刊した一冊の余白のおもさに、ことばをことばにかえして、われわれの壺に棲むカメレオンが読む。六月の黄色いひかり。

◆とてつもなく自由に描く

月村香

わたしの右横に五人の合唱隊がいるどれも美しい女たちで歌声は赤いなぜってさつき聞いたから左手にはこれも五人いると思っていたら胸を病んだ女がひとり欠けていて四人のコーラス隊ということになる白い音を出しているしかも必死にしかも耐え難く痛く歌う色は時としてところと変わっているが自由でとてもいいわたしはそれらの歌声をエルンストにまねて画布にしたためようかと思ってみるがもうその画布にはわたしが描かれてる

◆ 鉄梯子を登る私と

羽根、羽根、羽根の話

中堂けいこ

ところで私は相変わらず鉄梯子を登り続けているのだが、この無機質なセメント壁に頑丈に埋め込まれた金属棒を手のひらで掴むたび、埋め込んだ何者かの強い意図を感じ取ってしまう。だが私にはその意図の方向がさっぱりわからないのだ。これは正真正銘の本物の現実なのだろうか。それとも時おりよみがえる生活の場面、例えば、昼下がりのキッチンで小麦粉をこねたり、通勤電車のつり革にぶら下がって車窓から見える朝の学校だの洗濯物を干す女やらがかすめ過ぎるのなど、手の感触が強引に記憶を引き戻し、見せかけの現実と思い込まされているのか。しかし私には鉄梯子をよじ登りながら、眼前の薄汚れたセメント壁こそが本物らしく思えるのほどうしたことか。

おまえは可哀想に、羽根がないからなあ。父は口癖のように私に言ったものだ。羽根があればこのような壁は楽に飛び越えられるとでもいうのだろうか。確かにこうして鉄梯子を片手ずつ上に伸ばしながら体を引き上げる私の肩あたりを羽虫のようなモノがぶんぶん音を立てて飛び回っている。彼らは自分の行く先がわかるのだろうか。はるかに遠い、しかし案外に近いかもしれない、壁の途切れる頂上がどのあたりであるか。そこでは視界が開け光が満ち溢れていることだろう。

そいつは天国か地獄かわからない、父はこの世のどこでもないと言い、やるべきことを終えればいつだって大丈夫だと言う。背中が痒いと言うので寝巻の背に腕を差し入れると案外につるつると滑らかな肌をしている。そのあたりが痒いのだ、もうじき羽根が生えるのだから。そうか、きつと立派な真つ白い羽根が生えてガブリエルみたいな天使になるのか。いやアイツはキライだ。キライだ、という会話を続けながら、どこかでピタンピタンと水滴の落ちる音がする。それは小さいガラス状のカプセルのなかで、針のさきから水がしみ出て、雫になり、下に落ちる。ほんのちいさなカプセルの中なので音などするはずがないのだが、耳について離れない。

ランドセルを背負う肩のすぐ下の肩甲骨あたりがむず痒くなり、いきなりシャツが裂けて羽根が現れる。両腕を上げると羽根は大きく羽ばたき、駆け出す。何人かの子供たちがいつせいに背中から羽根を生やして羽ばたいていく。夏休みの始まるその日、灌木や青い草地を超えて空に飛び立つ、マキヤモン「少年時代」のクライマックスの場面だ。あの後の事がしきりに気になる。大人には内緒だが、大人は知っている、大人になると忘れた振りをしている、あの羽根の痕跡を私は覚えていて。右の肩甲骨の窪んだあたりに、ちょうど手の届かないあたりに小さな傷があるのだ。決して癒えることのない、塞がることのない小さな穴が。

父が痒がる背中への貼る薬の周辺をさわってみる。いつ空を飛んだか。ガブリエルよりニケの羽根がいいな。おまえは可哀想に、その鉄梯子は終わりが無いんだよ。セメント壁のずっと下のほう、暗くてよく見えないあたりでピタンピタンと音がする。あの水は何処へ流れるのだろうか。登り続ける限り鉄梯子が続くことはわかっているのだが。

※ロバート・マキヤモン「少年時代」

サモトラケのニケ：勝利の女神像

◆ 砂浜

寺岡良信

雨季と雨季の裂け目から洩れた月光が

砂浜を蒼い傾斜にした

鳴き砂が密やかに囁くその道を下つて

わたしは今日赦しの国に行く

夏の星座が短い夜を刻んで

潮騒に隠れた水底の聖地

あたりまへの約束が

あたりまへの通りに

おこなはれる

儀式には

いかなる奇蹟も起こるはずはなかった

わたしが歩み出したとき

わたしの影が

ハマナスの香りを

嗅いだほかは

記憶に間違いがなければ、作者は菊池寛で、題名は『笑った少年』であつたように思う。ときは寛永九年、芝増上寺の大広間に大名小名綺羅星のごとく居並び、前征夷大將軍にして大御所である徳川秀忠の通夜がしめやかに執りおこなわれている。関ヶ原の合戦から三十二年、大坂の役からは十七年、徳川の天下は盤石を極め、ここが忠誠心の見せどころと会葬の諸侯たちは皆鹿爪らしい面持ちで、いつ果てるとも知れぬ読経を聴いているが、さすがに三日目の夜ともなると、そろそろ疲労と眠気に緊張も緩んできて、足を崩す者、船を漕ぎ出す者と、いささか醜態の感を呈してきた。

菊池の筆致は心憎いほど巧い。私はこれを読んだとき小学校の五年生だったが、虚仮威しの儀式に長々と付き合わされる大名たちの溜息が聴こえてくるようで、笑いを禁じ得なかつた。けれども笑つたのは読者である私だけではない。物語の中でも、二人の小姓が肘をつつき合いながら、「おい伊達殿を見ろ」「加藤殿を見ろ」と含み笑いをこらえている。仙台藩六十二万石の太守、独眼竜政宗も、虎退治で勇名を馳せた肥後五十二万石の跡取りも、まるで形無しだが、ついに加藤忠広が火桶に顔を突っ込んだからたまらない。笑いをこらえきれない小姓。自分の失態は柵に上げて睨みすえる加藤。後日役人が詮議に乗り出し、一人はしゃあしゃあと言ひ抜けたが、もう一人の少年はどうしても嘘がつけず、切腹を命じられた、というのが物語の顛末である。

どうして五十年以上も前に読んだ話を、巨細に憶えているかと言うと、重大な決意の前に翻弄される少年の心理が、同じくらしい年齢の読者を想定して書かれたに違いないこの物語を通して、心身を腑分けされるような恐ろしい緊迫感をもつて迫ってきたからだ。嘘をつくか、正直に告白するかは、このような場合、その人物の善悪を決定しないだろう。非は自分にはない。しかし大人たちの薄汚さに嫌悪感を覚え始める年頃の少年の心は、言わば壊れやすくデリケートな器物で、嘘をついて難を逃れるのが穏当な状況下で、「幼い」自尊心や「幼い」見栄や「幼い」ヒロイズムが、その邪魔をする。大人にとつては

「すると不思議にもその骨牌の王様が、まるで魂がはいったように、冠をかぶつた頭を擡げて、ひよいと札の外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮かべて、『御婆サン、御婆サン、御客様は御帰りニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ』と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨脚までが、急にまたあの大森にしぶくような、寂しいざんざん降りの音を立て始めました」

「陥穽」という言葉を、私が知つたのはもつと後だが、芥川はそれこそニヤリと笑つて、欲望や野心ばかりでなく財や名誉や成功ですが、うたかたの幻影でしかないことを、囁きかけたのではないか。

私は立身出世主義からはほど遠く、世俗的な野心や名誉とは、縁のない人生を歩んできたように思う。それどころか、あるときは虚無感に取り憑かれ、人並みの幸せを自ら破壊する衝動さえ抑えきれないことがしばしばあつた。それは愛する人たちを不幸にし、自らを傷つけた。現在、私が日々苛まれている孤独感、そのことの負の報酬であろう。小学校から中学にかけて、私の家庭はいびつに病み、父と母のあいだには争いが絶えなかつた。その中で読書に没頭している思春期前の少年には、周囲が期待するような健全な道徳性は、どこか偽善的で嘘臭く映っていたのかも知れない。

母は苦しい家計をやり繰りして、私と弟に学習雑誌を与え続けてくれた。その母が好んで読んで聴かせてくれた作品がある。小川未明の『野ばら』である。この作品に対してだけは、ひたすら愛おしく、薰り立つ香氣と透明で清冽な悲哀を、私は今なお抱いている。日増しに募る自虐的な自己分析の代償に、また父との確執に死ぬまで苦しんだ母への思慕

NO.049 寺岡良信

夜の調べに寄せて

『野ばら』のことなど

世間知の一つでしかないものが、まだ大人になりきらない少年には「潔癖」に固執するあまり、深刻な葛藤をもたらすのだ。加えて、巧みに練られたプロットとストーリー展開。場面の一齣一齣が澗とした映像をとまなつて立ち上つてくる、描写力の確かさ。無論小学生に「大名小名綺羅星のごとく居並び」の字句が理解できていたかどうかは怪しい。が、主題の恐ろしさと文章の快適さは、身体に取り込まれてゆく。これは私にとつて、読書することの喜びの原点となつた作品と言つてもいい。

その頃、私の家では小学館発行の学習雑誌を購読していた。『小学四年生』『小学五年生』といった学年ごとの編集で、私はこの雑誌が配達されるのを心待ちにし、精巧な万華鏡を覗き見るように、そこに掲載されているさまざまな童話や小説にのめり込んだ。

たとえば、豊島与志雄の『手品師』。ハムーチャという大道芸人が、婆羅門僧マージのもとで七年間荒業を積み、手に取るものをすべて煙に変えてしまう秘術を会得する。都に帰つたハムーチャの盛名はベルシヤ全土に轟く。しかしその名声も栄誉も、美しい少女の誘惑から一瞬にして瓦解してしまうという、これも恐ろしい話だ。

「金色の髪がふさふさと肩に垂れ、海のように青い眼をし、薔薇色の頬をして、肌は大理石のように滑らかでまっ白」なその少女は、ハムーチャの中に眠っている官能をくすぐるように、こう語る。

「おまえさんの体を煙にしておくれ、しわくちやの醜い体の代わりに、あたしのこの肉体を差し出すから……この甘美な申し出を拒むことができなかったハムーチャが煙とともに消えて、二度とは還らなかつたという結末は、心身の底深く巢食う淫靡な欲望を浮かび上がらせて、私を金縛りにした。これが小学生を対象とした児童文学なのだろうか。同じく魔法を素材にした芥川の『魔術』では、インド人の魔術師・ミスラ君に弟子入りした「私」がうたた寝をして夢を見る。「私」はすでに魔術に習熟していて、銀座の倶楽部で燃える石炭を金貨に変える妙技を披露して満座の喝采を浴びていた。

「私」はミスラ君との約束通り、金貨をストープに戻さなければならぬのだが、一人の青年が骨牌で勝負をつけようと言ひ出す。賭けの条件は「私」が勝てば、金貨はもとより彼の全財産を「私」に引き渡すというものだった。一生遊んで暮らせるだけの財が「私」

と、息子として何もできなかったことの贖罪のために、せめてその一節を引くことにしよう。

「大きな国と、それよりはすこし小さな国とが隣り合つていました」「ここは都から遠い、国境であります。そこには両方の国から、ただ一人ずつの兵隊が派遣されて、国境を定めた石碑を守つていました。大きな国の兵士は老人でありました。そうして、小さな国の兵士は青年でありました」

最初はろくに口も聞かなかつた二人だが、すぐに打ち解けて仲良くなる。野ばらが一斉に花を咲かせ、燦々と降りそそぐ午後後の光の中で、ミツバチの羽音だけが聴こえている。将棋に熱中する二人：だがこのどかな日々も長くは続かなかつた。二つの国が戦争を始めたからである。若者を前に老人が口にする言葉は悲しい。

「さあ、おまえさんと私は今日から敵どうしになつたのだ。私はこんなに老いぼれても少佐だから、私の首を持つてゆけば、あなたは出世ができる。だから殺してください」

若者は北の戦線へと去り、老人だけが残される。青年はどうなつたか、身の上を案じ続ける老人。通りかかった旅人の話によると、戦争は小さな国が敗れ、その国の兵士は皆殺しにされたという。

孤独と寂寥が悲哀をとまなつて老人の心を濡らす。

老人はある日夢を見る。

「あなたから、おおぜいの人のくるけはいがしました。見ると、一列の軍隊でありました。そして馬に乗つてそれを指揮するのは、かの青年でありました。その軍隊はきわめて静粛で声ひとつたてません。やがて老人の前を通るときに、青年は黙礼をして、ばらの花をかいだのであります」

母はここを読むとき、いつもうつすらと涙ぐんでいた。端正で格調高く、美麗で哀切な名文：私は先頃、死に召される私の影法師が、私自身から離れてハマナスの香りを嗅ぐという詩を書いたが、そのとき私の念頭には『野ばら』の一節があつた。もう輪郭さえ定かではない、遠い母の面影とともに。

遠い母の面影とともに



川柳作家・情野千里さんは
舞踏家でもある

先鋭的な川柳は、同じ十七音字を基底とする俳句より、詩に近いように感じている。この一カ月、川柳の作品を読んだり、評したりする機会があった。詩の教室「カフェ・エクリ」で姫路在住の川柳作家である情野千里さんの作品を読み、俳誌「吟遊」(発行人・夏石番矢)には、川柳同人誌「川柳CARD・2号」(同・樋口由紀子)を紹介。清水かおりさんの作品を取り上げ、それぞれ一句評を書いた。

情野千里さんの 川柳を読めば――

情野さんの作品については、「川柳マガジン」で特集された句のなかから選び出し一句評を書いたもので、今回はこのなかから三句を取り出して紹介することにする。

苺パフェの匂いアリスが消えた部屋

〈苺パフェ〉に〈アリス〉が付くと、いかにもの少女世界を体現した(二〇一〇年代風にいえば、きゅりーぱみゅぱみゅ的)世界らしい「つきすぎ」の句といえよう。だが、この句の観賞をそこで止めておいてはつまらなくなる。永遠に夢見る少女であるアリスは、永遠の不在を目標としているのだ。しかし、不在は不在のままに終わるのだろうか。その部屋には苺パフェの匂いは永遠に残っているのだらうか。アリスは、世界中の読者によって何度も、そして新たに不在を要求される。匂いが残るその部屋は、アリスが戻ってくるのを永遠に待っているのかもしれないし、

匂いが消失しないことで、アリスに不在を要求しているのかもしれない。そして作者にとつてのアリスの物語はいつたいどうなるのだろうか。アリスが部屋に戻ってくれば、「少女喪失」を是認することになるために、作者はアリスが永遠に少女であり続けてほしいと願うあまり、不帰を求めているのかもしれない。不在をアリスに突きつけることで、アリスを内在化した作者は「少女喪失」から逃れ、永遠の少女であろうとしている。

情死行 菜の花寿司に誘われて

川柳作品には時に、「シヌ シヌ」「ジョウシスル」とタナトスと近接する表現を見出すことが出来る。「コンナ会社ナンテ、辞メテヤル」と言うことで自分と会社の関係性を測つて翌日には再生して働いているサラリーマンの喩えを出すのは失礼だが、川柳文芸は「シヌ シヌ」「ジョウシスル」と表現することで、生きていること／生きていくワタシを再確認する文芸であると思つていい。川柳はきわめて深く〈生〉に依拠した文芸であるからだ。情死への誘いが菜の花寿司だというのは〈食べる〉という生(あるいは性であること)の発露なのだ。この句は、ほんとはあるかもしれないという蓋然性を築しむ作品でもある。そういえば、お初と徳兵衛(「曾根崎心中」)が心中を決行したのは新暦でいえば五月。徳兵衛が心中を持ちかけた時にお初と食したのが菜の花だったこともありえるのである。

黍を蒸す鴉になつた兄のため

奄美・沖繩では甘藷のことを単純に「きび」という。しかし、この句の黍は五穀のうちひとつのイネ科の一年草から穫れる穀物のことをさす。正岡子規に〈粟刈りて黍にむらがる雀哉〉という俳句があり、黍は秋の季語である。食材としての黍は蒸すことで活用されることが多い。情野川柳世界では、黍と〈鴉になつた兄〉という転生譚を絡ませている。〈蒸す〉という外気と遮断して呼吸を圧殺した行為に、鴉になつてしまい、ヒトでなくなつてしまった兄の圧殺された光景が重なつていく。ザムザ(カフカ「変身」)になつてしまった兄に対して、家族はある時期までかいがいしく食べ物を与え、世話をしていたのだ。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.82
めらんじゅ

2013年06月30日 通巻82号
発行所/月刊『Mélange』編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人/大橋愛由等 (『Mélange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円 (税込)